説教20210502使徒8:26-40 ヨハネ14:15-21

「見ようとするとき」 181　21-137　222

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今日の使徒言行録の聖書箇所は、実にビジュアルで映像化して映画にでもしたくなりそうな箇所です。インターネット動画にもまだないようですので是非どなたか手掛けてみてください。しかし、その前に私達はこの箇所をよく読んで、各自黙想をして、この場面に入り込んでいくことが必要でしょう。

　時は、主イエスが天に昇られ、聖霊が地上に降りてきた時期のイスラエルでの出来事です。使徒の一人であるフィリポは、天使の導きによって、エルサレムからガザに下っている馬車を追いかけます。そこは寂しい道でした。馬車の中にはイザヤ書の53章、苦難の僕の箇所を朗読しているエチオピアの宦官がおりました。この宦官はユダヤ教の求道者で、今迄、救いを求めてエルサレムの神殿や会堂で、ユダヤの教師たちの教えを聞いてきたのであります。しかし、彼は、その教えでは十分に満足できなかったようです。宦官は言います。「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」。宦官は待ってましたとばかりにフィリポを馬車の中に迎え入れ、彼を横に座らせたのでした。

　今日の招きの言葉でも読まれましたイザヤ書53章は、苦難の僕の死について預言している箇所ですが、それは言うまでもなく私達の救い主イエスキリストについて預言するものです。フィリポはイザヤ書から説き起こして、主イエスの十字架と復活に至るまでを説いて聞かせるのに数時間かかったことでしょう。その馬車の中での授業は、二人にとって突然訪れた、いわば課外授業の時間であったのです。

　今日はちょっと大胆に、正規授業と課外授業という言葉の使い分けによって、私達が聖書を、そして主イエスのことを学ぶというのはどういうことなのかを、ひも解いていきたいと願います。

　さて、今日の世の中では、正規授業といえば小中学校での義務教育、そしてそれに連なる高校大学での高等教育がイメージされるでしょう。段々世の中が不確実になってきましたので、一昔前の様な、よい大学さへ卒業すれば、一生安泰だ、などと言う、いわば幻想はどこかへ消え去った感があります。しかし、そうはいっても人々は、大学教育を人生における保険のようなものとして考えて、とりあえず大学を出ておけば安心だろう、といった発想で、この世における正規教育の過程を進んでいくことも多いでしょう。数えてみれば、保育園から大学までずっと正規教育を受け続けたら、それは１５年以上にも及ぶことでしょう。思えば人間は随分と長い間、正規授業を受けるものです。そして半分以上の方々がうんざりして、もうこんな授業は沢山だといって、社会に出てから勉強しなくなるのもうなずけるのではないでしょうか。

　しかし、ここで私達はそのようにいじけてしまってはいけないのです。世の中には、正規授業のほかに課外授業もたくさんあるのです。課外授業というのはコースに乗らないと言いますか、宦官がフィリポから受けた授業のように、いつ何時その授業を受けるチャンスが訪れるか分かりません。課外授業は正規授業のように予め、達成目標をたてて計画的に進められるといったことではありません。世の中的に言えば、一昔前までは、社会は学校などと言って、学校を卒業してから身を置く会社などで、実際にもまれながら必要な知識や見識を体得していくという事が言われましたけれども、それも課外授業の一種でありましょう。また、ある時、何かに導かれて、教会の門をくぐって、牧師の説教に耳を傾けるというのも一つの課外授業でありましょう。

　さて私達は、今や、この世の正規授業だけでは人生うまくいかない、という事を認識しているのではないでしょうか。しかし、ではそれに加えてどのような課外授業を受けていけば良いのか、ということが大きな問題になってきていて、ですからこの世の中には様々な習い事や塾が乱立して、子供たちはあちこちの課外授業に顔を出すのに大忙し、という状況になっているのでありましょう。でも、残念なことに、では教会の日曜学校に行ってみよう、という子供が少ないのは、残念なことではありますけれども、私達は出来るだけ、敷居を低くして、子供たちが教会に招かれるのを待ち望んでいきたいと思います。

　さてこの宦官がエルサレムの神殿や会堂で受けたユダヤ教のいわば正規授業に満足できなかったのには訳があります。ユダヤ教の教師であるラビや律法学者たちは、総じて、イザヤ書53章のような、苦難の僕の死が記されている聖書箇所を読み飛ばしてしまうらしいのです。彼らは、救い主イエスキリストに触れるのを恐れて、イエスキリストが預言されている箇所から目をそらしてしまうのです。今日の説教題に即して言えば、彼らはイエスキリストを見ようとしないのであります。そのような教師にいくら教わっても、イエスキリストの救いが知らされる訳がないのです。

　ユダヤ教の教師が得意とするのは、申命記までの律法的な教えだったでしょう。去年の別府不老町教会の年度目標「あなたの神、主を畏れ、わたしが命じるすべての掟と戒めを守って長く生きる」というのもその律法的な教えの一つであります。ですから律法的な教えは私達クリスチャンにとっても不可欠なことでありますが、それだけでは十分ではありません。それに加えて私達に必要なのは、宦官がフィリポから受けたような課外授業であります。

　さてイザヤ書53章を見てみましょう。５節に、「彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」とあります。私達は、今の危うい世の中においてこのことを実感しているのではないでしょうか。罪深い私達は、自分以外の誰かが懲らしめられる、傷つけられることによって、自分が癒され救われる、という、大いなる勘違いをしてしまうものです。この勘違いによって、悲惨ないじめやモラハラが蔓延している様です。私達はここで、誰が傷つけられたことで、私達が救われたのかを厳しく問わねばなりません。宦官もこの点をしつこくフィリポに問いただしています。「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」このイザヤ書に記されてる人物は誰なのか、宦官もこのことが気がかりでならないのです。傷つけられてもいじめられても平気などころか、尚いじめる者を憐れんで、父なる神にその者の救いを求められるのは、実に、天下に主イエスキリスト以外には、私達人間には与えられていないのです。

　フィリポはこのことを教えられるをひたすら待ち望んでいたのです。見ようとしていたのです。この願いは、フィリポという人物との馬車の中での課外授業で実現しました。ここら辺が実に映画にでも出来そうな現実的な場面ですが、もう一か所そのような美しい学びあいの場面をご紹介するとしたら、それはルカ福音書で、エマオへの道を歩む二人の弟子が復活の主から聖書を解き明かされ、二人が、イエスについて「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った時のことが思い起こされます。

　このようにして、フィリポは宦官に復活の主イエスの福音を告げ知らせた訳ですが、それで宦官は洗礼を受けることになりました。すると、教師であるフィリポの姿は見えなくなったのです。ここにも課外授業の特徴がよく表れているでしょう。教師フィリポはこの課外授業を終えると、宦官の前から姿を消したのでした。しかし、宦官はもはや教師フィリポがそばにいなくても、喜んで自分の旅を続けることが出来るようになったのでした。

　教師フィリポはこの馬車の中でのこの数時間の授業で、この宦官に教えるべきことを全て教え、その教師としての役目を果たした後、潔く彼の前から姿を消したのでした。フィリポこの後、アゾト、カイサリアといった海辺の町々に出没して、同じように聖書を教え主イエスの福音を宣べ伝えたのでした。

　一方の宦官は、キリストを信じる者とされ、フィリポから教わったのと同じようにして、その教えを、エチオピアに戻ってから隣り人たちに教え始めたことでしょう。私達は、この学びの連鎖に、正規授業にはない、自由に満ちた喜びの展開を見出すことでしょう。

　実は、このような自由に満ちた課外授業は、私達が、みなしごにはして置かれないための大切なレッスンであるように思います。この課外授業は、みてきたように、自由闊達に口づてに人から人へと伝えられて行きますが、その源にあるのが聖霊であります。今日のヨハネ福音書では聖霊のことを、別の弁護者とも呼んでいます。この別の弁護者がいるから私達はみなしごにはしておかれないのです。

　フィリポは聖霊に導かれて、宦官の馬車の中へ招き入れられました。聖霊は英語で言えばスピリットであります。今、この会堂にも聖霊、スピリットが満ちています。私達はその聖霊、スピリットにインスパイアーされて、大切な学びへと導かれることでしょう。インスパイアーされるという風に、カタカナ語を使ってしまいましたが、日本語で言えば、触発されるとか、示唆を受けるとか、目を開かれるといった意味です。学究肌の学者さんという言い方もおかしいかも知れませんが、長年、正規授業を受けられた、学者さんですと、このインスパイアーされたときの喜びというのを知っておられると思います。

　このように正規授業と課外授業は、あい補いあうものかも知れません。正規授業はいつしか陳腐化し、形骸化していく恐れがあるでしょう。それに、新たな息吹を注いでいくのが課外授業でありましょう。もし、この宦官がエルサレムの神殿や会堂で、ラビたちからユダヤ教の正規授業を受けて来なかったならば、かえって、そこで欠けていた主イエスの福音という事柄を、探し求め、見ようとする心も与えられなかったことでしょう。

　私達は、この世での安泰、安全を追求するあまり、現状の正規授業に寄りかかろうとしています。しかし現状の正規授業はいつしか陳腐化、形骸化していくことを免れません。ですから、私達は外に目を向けていくのですが、その時に私達が、どのような霊に支配され、どのような霊に導かれているのかは、大切なことです。この別府不老町教会の木曜祈祷会で、私たちは、聖霊とは、主なる神からの憐れみと分別の霊であることを学びました。この分別の霊に身を委ねるという事は、自分自身の持つ悪さを明かるみに出すという事でもあり、そこには、我が身を裂かれる痛みが伴うかも知れません。しかし、私達には、主イエスが私達の代わりにその痛みをも引き受けてくださっという救いがあるのです。どうかこの一週間もその主イエスに私達が全てを任せて、勇気を持って学びながら一歩一歩を歩んで行けますようお祈りいたします。

祈ります

天の

私達は、苦難に満ちたこの世にあって、みなしごにされたかのように、寄る辺ない日々を送っています。しかしあなたは常に、私達の上に聖霊を送られて、どんな時でも、見ようとするものに、あなたの真理と平安を教えてくださいます。どうか私達が、この世で、しつらえられた学びだけにしがみつかず、あなたの霊によって、まことに大切な事柄を学んでいくことが出来るようにしてください。

あなたが与えて下さった花の日の礼拝はこのように、美しい花々で飾られております。この世に咲く一瞬一瞬をあなたが祝福し、やがて塵となる、全ての被造物を聖霊によって永遠に祝福してください。

ことに、若い人たちが、この世の常識や、自らの欲望に捕らわれて、元気を失っている現状を顧みてください。あなたの愛する御子が苦しまれ命を取られたことによって、私達が救われていることを、真理の霊によって、私達に気付かせて下さい。

父と聖霊と共に一体であって